

新型コロナウイルスと国民皆保険

—アメリカ社会のかかえる病弊

中島 晃

いま世界は、新型コロナウイルスの爆発的な大流行（パンデミック）の真つ只中にある。なかでもアメリカは、感染者数でも死者数でも世界一という不名誉な数字を記録している。アメリカは、CDC（アメリカ疾病予防管理センター）という最先端の感染症対策の研究施設をもっている。スタッフの面でも、資金面でも、世界でこれを上回るような研究機関は存在しない。にもかかわらず、アメリカがこうした状況におかれているのはなぜだろうか。

その直接的な要因が、感染防止よりも経済活動を重視するというトランプ大統領の政治姿勢にあることはいうまでもない。しかし、それだけではない。アメリカには、すべての国民が公的な医療保険に加入しているという制度、いわゆる国民皆保険がない。

このことが新型コロナウイルスによって世界で最大の死者を出している根本的な原因であると考えられる。

そこで思い出したのだが、数年前に読んだ、原田マハの『デトロイト美術館の奇跡』（新潮社）は、アメリカ社会のかかえる病弊を実にさりげなく、しかしリアルに描いている、出色の小説である。

かつて、自動車産業で栄えた街・デトロイト市は、いまでは、すっかりさびれて深刻な財政破綻に陥った。ピカソやゴッホ、マティスにモネ、そしてセザンヌなど珠玉のコレクションを有するデトロイト美術館（愛称DIA）は、このため売却の危機にさらされていた。

このことを知ったデトロイトの退職労働者の一人、フレッド・ウィルの情熱と一歩が大ききうねりを生み出し、資金調達キャンペーンが寄付金目標額を達成して、DIAは売却の危機をまぬがれる。

フレッド・ウィルは、十代の頃から自動車工場で働いてきた労働者だったが、妻のジェシカに連れられてDIAを訪れるようになり、そこに展示されて

いるポール・セザンヌの作品「マダム・セザンヌ」

（画家の夫人）に魅せられ、2人連れだつてDIAに通うようになった。

ところが、2人で足繁くDIAに通うようになって十年以上経ってから、妻のジェシカが体調を崩したが、アフリカン・アメリカンであるフレッドの両親同様ジェシカも医療保険に加入していなかった。手術には多額の費用がかかる。自宅を担保に借金をしようとしたが、銀行に断られて、手術もできず、入院すらできないままに、ジェシカはなすすべなく死を迎える。

フレッドとジェシカ夫妻のように、アメリカの労働者の多くは、医療保険に加入しておらず、病気にかかっても、高額な治療費を負担できないために、満足な治療を受けられないまま死に至るといふ深刻な現実がある。「デトロイト美術館の奇跡」は、フレッドのようなDIAを愛する無名の労働者の善意が美術館を救つという感動的な物語であるが、同時にこの物語は、アメリカの労働者の多くが医療保険に加入しておらず、このため必要な治療を受けられずに死を迎えるという冷酷な現実があることを教え

てくれている。

G7（主要先進7国、英・米・日・仏・独・伊・カナダ）で、唯一アメリカだけが国民皆保険ではない。アジアでは韓国や台湾も国民皆保険があり、そのことが新型コロナウイルスの感染拡大を防止するうえで、重要な役割を果たしている。

アメリカでは、オバマ政権のもとで、いわゆるオバマケアが採用された。しかし、その実態は、民間の医療保険の加入を義務づけるものであって、国民皆保険とは全く異なるものである。

オバマ大統領は、新たな公的医療保険制度の創設を試みたが、最終的にその導入は見送られた。このためアメリカは現在も、先進国でほとんど唯一の国民皆保険ではない国である。いま、アメリカでは差別反対運動が大きく広がっているが、アメリカで公的な医療保険を拡大し、国民皆保険を実現することに根強い反対がある背景には、アフリカ系住民に対する差別があるといわれている。

新型コロナウイルスは、国民皆保険がないことによるアメリカ社会のかかえている深刻な現実を浮かび上がらせているといえよう。